

さんしゃ Zapping

Vol. 33 No. 2 (通巻 190 号)
2018 年 9 月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsume.ac.jp

<http://www.ritsume.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔 目 次 〕

<自著紹介>

H・ワーグナー 著

『アルフレッド・シュッツ ある知的伝記』の翻訳を終えて

佐藤 嘉一 p. 2

<共同研究会報告>

The Multiscalar Puzzle of

Social Innovation of European Social Policy

櫻井 純理 p. 5

<アドバンスドセミナー報告>

ビジネス誌で語られる「望ましい振舞」

—対人関係の技法を社会学する—

谷原 吏 p. 7

<院生自己紹介>

クラフトビールが私達の世界を変える？

一井 崇 p. 10

<エッセイ>

沖縄のサンゴについての「どうーちゅいむにー」

三笥 利幸 p. 13

<自著紹介>

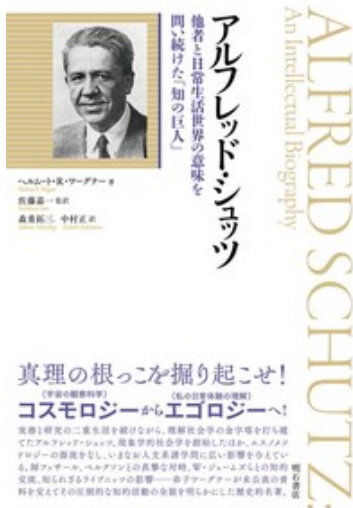
H・ワグナー著

『アルフレッド・シュッツ ある知的伝記』の翻訳を終えて：

シュッツの「汝の経験科学」に学ぶ

立命館大学名誉教授

佐藤 嘉一



この度、産社出身の森重拓三・中村正の両君の協力を得て、上記の翻訳書を「明石書店」（東京）から世に出すことができました。原書の副題「ある知的伝記」を「他者と日常生活の意味を問い続けた『知の巨人』」に変更した。このほうが本書の主題の意味が読者に分かりやすく伝わるのではないかと考えたからである。

本書は、シュッツの門弟であり親友でもあるヘルムート・ワグナー（1904－1989）がシュッツの出版物、草稿、手紙等を用いて纏め上げた、三部八編十八章からなる成る大著である。もともとの草稿は三十八章からなる著作物であったが、これをその二割ほどに圧縮したとワグナーは記している。

著者は本書を特徴づけて、アルフレッド・シュッツの個人的思想的伝記を「一元的な哲学的社会学的理論」として著述する試みであり、その趣旨は「問題設定のルーツを意識生活の根本事実に至るまで遡る」（69頁）試みであると言う。ワグナーの「一元的な…理論」をシュッツ自身の言葉に翻訳すれば、「汝の経験科学」（43頁）に相当するであろう。アルフレッド・シュッツ（1899－1959）その人（「汝」）に専ら関心を集めて（「一元的に」）その独自の人生経験を「哲学的社会学的理論」（経験科学）として構築す

るという意味である。次の三点が「汝の経験科学（一元的な哲学的社会学的理論）」の基本的構成要素である。

第一に、汝の知的生涯を「相互に絡み合う四要素の連鎖」として把握すること（12頁）。(a)汝のライフサイクル、(b)汝を特定の社会構造および世代系列に統合するための文化的条件・社会制度的条件、(c)汝の伝記に関する経歴、そして(d)これらの連鎖系列における連続性を妨げる社会的な生活における社会的歴史的変動。これらの連鎖のうち、汝の生活世界、汝の「知的」生活経験の「複合的構造」を客観的に解明する試みである。この四要素の連鎖こそ汝の経験した社会構造の「賦課的レリヴァンス」であり、汝の生活世界の周縁、外部地平に見え隠れする「客観的」意味連関の現実である。第二に、汝の生活世界の中核を常に占めているのは、「nunc/いま・hic/ここ・sic/しかじか」の状況に生きる汝の自伝的内部的体験の意味の世界である。「主観的に思われた意味」理解（ウェーバー）の緻密化である。第三に、これら二つの近傍に「汝の身近な生活世界」としての「汝と我」の「社交」の世界、相互行為とコミュニケーション＝意思疎通の「間主観性」の世界がある。

これ等の三契機、客観・主観・間主観の三契機の力動的連関の解明が、本書におけるシュッツ(汝)の知的献身の「十四段階」論（第一部知的献身の生涯）をは

じめとする、本書全体の中心テーマである。「汝」(シュッツ)における「四つの相互に絡み合った経験世界」、この経験世界の諸社会の諸生活における「社会的-歴史的諸変動」が汝の日々の生活の営みにとって「疎隔」的に作用すればするほど、汝の身近な生活世界、「我と汝の間柄」(社交性・コミュニケーション・援助)のうちに生きようとする、その間主観的現実の「親密性」はその密度を濃くするだろう。事実、シュッツの知的創造の営みにおいて、シュッツと運命を共にした親身の「汝」の姿が「ここ」の現場に「しかじかに」現前したことである。ウィーン時代にはフェリクスリクス・カウフマン、ウィーンとパリ時代にはエドムント・フッサールが、そしてニューヨーク時代にはアロン・グールヴィッチがいた。

本書「三部八編十八章」から成る「生活世界の社会学」の論考は、「汝の経験科学」の体现であり、いわゆる「経験科学としての社会科学」の従来型の「論理」(パーソンズ、ハーバーマス、ルーマン)に代替される斬新なパラダイム転換、「一元的な哲学的社会学的理論」の具体化と言ってよい。

総じて改めて問うことのない、当たり前前の「日常の生活世界」は、シュッツ＝ワグナーによれば、社会的行為者たちの間主観的理解による意味的構成組織、「馴染みの知・常識の知」(相対的自然

的世界観)に基づく「生活世界の構造連鎖—一時空間的・社会的・間主観的(言語等の知識在庫)構造—」に他ならない。

既述の通り、シュッツはこのような知的伝記の研究を「汝の経験科学」と名付けた。‘Hic egregie progressus sum (「ココガマサシクハジマリデアル」1958. 12.)と記したシュッツ最晩年の包括的研究のプログラムである(本書 508 頁参照)。シュッツの提唱は、見たように、‘ニヒリズム’でも‘冒険主義’でもない。ライブニッツの‘fiat’厳命とベルグソンの「持続」とフッサールの「省察」の合流としての“天地の創造”ならぬ「我と汝の間の意味構築の共同作業の継続」、「現在・過去・未来の進み行き」の‘ここ’に踏み止まる企画である。この‘ここ’との「レリヴァンス」(関わり・関心)の中核から放出される人間の生きた姿が主題に座るのである。ワ

ーグナーは、自分自身(私=Ich)の目に映る親友シュッツ(汝=Du)の日常生活の現場‘ここ’に踏み止まり、その「時空的」「社会的」「知的」地平上に出没する「もの・こと・ひと」との「関わり」(レリヴァンス)においてシュッツ({汝})の生涯、その知的生涯を明らかにした。

森元孝氏が「H. R. ワーグナー著『アルフレッド・シュッツ』(明石書店)を読む」の書評を『図書新聞』第 3351 号に寄せている。「アルフレッド・シュッツ研究のバイブル：丹念な翻訳が果たしてくれる基本知識の共有」とある。これも偏に本学部の中村正・森重拓三両君の協力によるものである。最後に、本書の刊行に当たり、立命館大学産業社会学会の 2017 年度学術出版助成を受けた。記して感謝の意を表す。

<共同研究会報告>

The Multiscalar Puzzle of Social Innovation of

European Social Policy

欧州の社会政策における社会的イノベーションの多層性

—ローカリズムの批判を乗り越える評価軸の設定

櫻井 純理

開催日時：2018年6月22日（月）14:40～16.20

会 場：学而館第2研究室

報告者：ユーリ・カゼポフ氏（ウィーン大学社会科学部社会学科教授）

6月22日、ウィーン大学のユーリ・カゼポフ（Yuri Kazepov）先生をお招きした共同研究会を開催した。この研究会は、カゼポフ先生がウルヴィーノ大学（イタリア）に在籍されていた頃から親交のあった土岐智賀子さん（本学社会学研究科出身）に仲介のご尽力をいただき、実現したものである。

カゼポフ先生のご専門は比較社会政策、国際都市社会学で、福祉ガバナンスや若者支援政策等の領域で国際比較研究のコーディネーターとしても活躍している。今回の研究会では「社会的イノベーション」をテーマに、1時間強の報告を行っていただいた。中心的な問いは、

「社会政策におけるローカルなアクターの重要性をどのように評価することができるか」という点にあった。以下、ご報告内容の概略を紹介する。

「社会的イノベーション」とは、権限移譲を受けた多様なアクター（市民社会、社会的起業家、地方自治体等）が、政策のデザインから供給に及ぶ広範囲にわたって参加し、既存の福祉国家政策が対応できない社会的ニーズの充足に取り組むことを指している。この概念には様々な定義があるが、それらに共通するのは「ローカル」という次元の重要性である。ローカルな主体が重視される背景には「補完性原理」に基づいた「権限移

譲化」の考え方が存在する。つまり、より市民に近い主体に政策実施の権限を委譲することが望ましいという考え方である。福祉国家の機能不全に対する打開策として、民営化やNPM (New Public Management) の導入が進められる一方、社会サービスの個別化や市民参加が促進されて、地方政府や市民社会組織の役割が重視されるようになってきた。

しかし、そのなかで様々な課題もまた浮上しており、ローカリズムに対する批判が生じている。すなわち、①地方間の不平等（特に地方ごとの多様性に富む場合）、②国と地方自治体等の政策コーディネートにかかるコストの増加や対立のリスク、③政策の透明性や説明責任の曖昧さ、④財源不足の改善を目的とする消極的な権限移譲、⑤市民社会組織の代表性の担保、⑥不安定な持続性といった諸課題である。

カゼポフ先生は、社会的イノベーション（におけるローカリズムの重視）は政策が遂行される「コンテキスト」次第で、多様な結果をもたらすと指摘している。たとえば、EU 諸国で実施されてきたHousing First 政策の事例を見ると、イタリアとスウェーデンでは政策の実施主体・方法・結果は大きく異なるものだった。社会的包摂の推進において、社会的イノベーションは高い可能性を持つとはいえ、その国や地域の社会状況やガバナンス構造との関わり方（＝コンテクス

ト）をつぶさに観察することが重要である。

もともとは同様の目的を持った公共的な政策であっても、その遂行のあり方によっては新自由主義的傾向を強化する「トロイの木馬」となりかねない。上述したような諸課題を解決するには、「積極的な補完性原理」に立った政策の推進が重要である、とカゼポフ先生は主張する。すなわち、ローカルレベルの政策が自然に「ボトムアップ」されて広まるわけではない。より積極的に政策をアップスケールする（国全体に普遍化していく）ことや、公的財源でローカルな主体を支える国家の政策が求められる。一例として、イタリアのある地方で導入された先駆的な政策をその後デンマークが取り入れ、国全体で導入したのに対し、イタリアでは今もその地方だけしか政策が実施されていない、という。

カゼポフ先生の報告内容は、とりわけ2000年代に入り「地方分権化」が推進されてきた日本にとって、きわめて示唆的である。筆者の研究対象である生活困窮者自立支援制度をみても、多くの事業は地方自治体の「任意事業」とされている。その結果、限られた財源のなかで消極的な取組みに留まっている自治体が多く、地方ごとの政策実施状況には大きな差が生じている。また、政策を実際に遂行しているのは、事業を受託したNPO等の民間機関である場合も多い。それらの

機関はプロポーザルに基づく競争入札を経て、短い委託期間で不安定な経営を余儀なくされている。

今後、日本でのこうした現状についての分析を深め、国際比較研究に発展させていく際には、今回の報告で言及された以下のような論点にアプローチしていくことが重要である。

* 地方ごとに、どんな主体がどんなコンテキストのもとで課題に取り組んでいるか。

* 財源はどのように負担されているか。

* “scale-keeper” は誰か：予算配分等

において、政策を実施する地方を誰がどのように選択・決定しているか。

* 誰がどのように異なるレベル（国—地方等）の政策を繋いでいるか。

研究会の質疑応答のなかで、カゼポフ先生は「分権化は支持するが、社会正義のために国家の役割は非常に重要である」と述べられており、ローカルな視点から国の政策課題を追求する必要性をあらためて認識した。最後になったが、今回、このような貴重な学習機会を得られたことについて、産業社会学会のサポートに感謝を申し上げる。

<アドバンスドセミナー報告>

ビジネス誌で語られる「望ましい振舞」

—対人関係の技法を社会学する—

社会学研究科博士前期課程 2 年生

谷原 吏

7月5日（木）のお昼休みに、「ビジネス誌で語られる「望ましい振舞」対人関係の技法を社会学する」と題してアドバンスドセミナーを行いました。院生という身分ながら、このような機会をいただいたことに感謝いたします。ここでは、セミナーを通じて私が伝えたかった

ことなどを敷衍したいと思います。

電車内の広告やコンビニの雑誌コーナーなどで、ビジネス誌を目にすることがあるかと思います。ビジネス誌では、ビジネススキルや対人関係に関するノウハウが大いに語られています。今回のセミナーでは、そうした言説を題材として、

「職場における望ましい振舞はどのように語られているか？」あるいは「そうしたことが語られることの意味は？」ということを経済学の観点から探求しました。

職場の人間関係は、古くて新しいテーマで、1920年代に、かの有名なホーソン実験により「発見」されました。その後、心理学や経営学の分野で経験的な研究が積み重ねられ、今では「マネジメント」や「リーダーシップ」という形で日常用語として浸透しています。こうした学術的知見や言説をむしろ権力作用と捉え、相対化した視点から分析したのがN. Roseの *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self* (1989) です。彼は、心理学的な知見が職業生活の場に入ってくることにより、「主体的で生産的な労働者像」が形成されるという見方をしました。このように、「日常」や「当たり前」を一步引いた視点から相対化できるのが社会学の力の一つだと私は考えています。こうした見方を受け継ぎ、それを職場における振舞のレベルまで落として研究しようというのが私の研究です。人々の振舞に関する規範から分かることはたくさんあります。例えば、N. Eliasは、中世のマナーブック、エチケットブックを調べることにより、社会がどのように「文明化」してきたのかを明らかにしました。「社会的に禁止されたものと要求されたものの標準」が

マナーやエチケットに表れるというのです。確かにマナーは時代とともに変わります。それならば、マナーや振舞を調べることにより社会規範を見出すことには一定の合理性があるといえるでしょう。

私もかつてそうでしたが、組織人として働いていく中では、朝職場に足を踏み入れたその瞬間から夜職場を出るまでに、様々な相互行為場面に直面します。朝エレベーターで上司と鉢合わせたり、急な作業を同僚に依頼せねばならなくなったり、他部署からの案に対して反論をしたり、ミスした部下に注意をしたり、夜に上司からの飲みの誘いを断ったり・・・などなど、人々は様々な相互行為を行い、その中で様々な気を遣って生活をしています。そうした相互行為場面で「望ましい振舞」とされているものを相対化してみよう、というのが私の研究のねらいです。分析の視角としては様々な考えられますが、今回は先行研究の蓄積から「authenticity (ほんものらしさ)」をキーワードに分析を行いました。

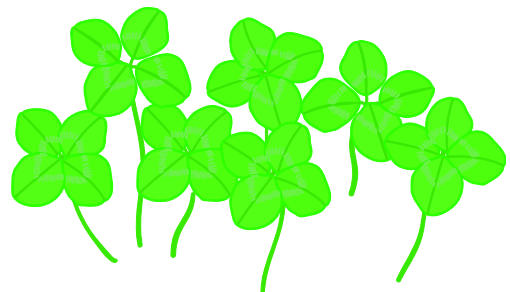
「ほんもの (authenticity)」は、近代の規範を捉えるキーワードの一つです。A. Giddensは *Modernity and self-identity: Self and Society in the Late Modern Age* (1991) の中で次のような主旨のことを述べます。現代では、近代以前にあったような出身地や家系等といったような、アイデンティティを規

定する外的基準が希薄です。なので、常に「ほんとうの自分とは何か?」「自分がほんとうに欲しているものとは何か?」ということを再帰的に問い続けて判断を行っていきます。そしてこうしたことは、他者とやり取りする際にも規範としてはたります。「相手がほんとうに思っていることは何か?」ということが重視されるのです。これは、職場での感情や相互行為を対象とした研究からも明らかになり始めています。

今回私が調査した『プレジデント』（プレジデント社）という雑誌でも、「ほんものらしく振舞う」ということが繰り返し推奨されています。例えば、上司を説得する際は「熱意」や「本気度」を表出すること、謝ったり褒めたりする際は「わざとらしくないこと」が繰り返し推奨されていました。また、円滑にコミュニケーションを取り周囲と打ち解けるためには、自分を飾らずに隙を見せるぐらいの方がよい、という技法も繰り返し紹介されていました。表出された言動がその人の本心を反映した自然なものであることを確認できることが求められて

いるのです。しかし少し考えてみると、これは大なる矛盾であることに気が付きます。「ほんもの」が推奨され、意識して表出されたものになった時点で、それは語の本来の意味における「ほんもの」ではなく、人々に作られたものになるのです。つまり、「ほんものらしさを演出する」という不可思議な事態がここに発生しているわけです。この点は今後、さらに深い理論的考察を行っていく予定です。また、上司を説得する場面、同僚と交渉する場面、部下を指導する場面など、様々な場面で要求される「ほんものらしさの演出」は非常に多様です。この点についても、それぞれの場面で、人々がどのように意識したり、やり過ぎたり、解決したりしているのか、さらなる分析を行う予定です。

最後に、アドバンスセミナー開催にあたり準備いただきました先生方、事務室の皆様、司会をお勤めいただいた金澤先生、お忙しいところ立ち止まって聞いてくださった先生方、学生の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



<院生自己紹介>

クラフトビールが私たちの世界を変える？

社会学研究科博士後期課程 3 年生

一井 崇

突然ですが、最近「クラフトビール」という言葉をよく耳にしませんか。読者の皆様の中には「以前、観光地などで流行っていた地ビールのことでは？」と思われる方も多いのではないのでしょうか。気になって少し調べてみますと、「ご当地ビール」として一括りにされた当時の地ビールとは少し異なり、個々のブリュワリー(醸造所)が味や香りにこだわりをもって生産する小ロットで個性の強いビールの総称であることが分かってきました。まずは、この「クラフトビール」について簡単に触れた後、クラフトビールと私自身の研究テーマとの関連についてお話しできればと思います。

【クラフトビールと地ビールの違いについて】

ビールは、ほぼ 90%を占める主原料の水や糖質源となる麦芽(主に大麦)、発酵の素となるビール酵母、香りや風味付けのホップなどによって製造されますが、酵母やホップの種類・量、副原料の違いによ

って個性的なクラフトビールが造られていきます。地ビールが誕生したのは 1994 年。酒税法の改正により最低製造数量基準がそれまでの 2,000kl から 60kl に緩和され、各地で地元産ビールが造られるようになりますが、やがてブームは去ります。私自身も前職の旅行業界に勤務していた頃は、添乗先の観光地で地ビール販売や地ビールを売りにするレストランをよく目にしましたが、あまりなじみのない味わいや高めの価格設定など今のように個性的なビールが広く受け入れられる土壌が当時はまだ無かったように思います。

ブームが去った後も技術を磨き続けたブリュワリーが複数存在し、その中から 2012 年にビール業界のオリンピックと呼ばれる World Beer Cup(米 Brewers Association の主催で 2 年ごとに開催)で大阪の「箕面ビール」が金賞を受賞します。それがきっかけで、関西でも再びクラフトビールに注目が集まるようになり、現在に至るというわけです。地ビールとク

ラフトビールに明確な定義の差はないようですが、各地の生産者のこだわりの強いビールとして地ビールとの差別化を図るため用いられている呼称のようです。

【与謝野町産のホップ】

さて、このクラフトビールと私自身の研究テーマとの関連についてですが、私は障害者の雇用や社会参加と持続可能な地域形成との関係性について京都府北部・与謝野町にある社会福祉法人の障害者支援事業を対象に調査研究を行っています。同福祉法人は、障害者雇用・就労支援事業の一環として同町の農業や観光事業を手掛け、障害者はその担い手として持続可能な地域形成を支えています。

その与謝野町は、農業をはじめとする第一次産業を基盤とする産業振興に力を入れており、町全体をブランド化する「与謝野ブランド戦略」を立ち上げています。その事業として 2015 年から純国産ホップの試験栽培を進めてきました。通常、国産ホップ農家は大手ビール会社と契約しているケースが多く、国内の小規模ブリュワリーが国産ホップを入手することは難しく、安心安全でフレッシュな町内産ホップの栽培が軌道に乗れば農業振興や新たな雇用創出につながると期待されています。同町では、将来的に町内でのクラフトビール醸造などの 6 次産業化を見据えており、同事業と障害者雇用が結び付けば町の活性化だけでなく、障害者雇用

を通じた包摂的な社会形成の更なる進展につながるのではないかと私自身も期待しています。

【クラフトビールが世界を変える？】

与謝野町産の生ホップを使用したビールですが、実は京都市内で飲むことができます。その場所は、キリンビールが手掛けるクラフトビールの専門店「SVB 京都（スプリングバレーブリュワリー京都）」（中京区）です。先日、今夏の初摘みホップを使用した出来たてのクラフトビールを早速いただきましたが、さわやかなホップの香りが口の中に広がる、とても美味しいものでした。価格は¥1000 強と少し高めでしたが、その一部が先の西日本豪雨で被災した同町の復興支援事業に寄付されるということで、地域支援のあり方にも様々な方法があることに改めて気づかされました。

各地の個性的なクラフトビールは、ビールの奥深さやブリュワーのこだわり（個性）、そしてクラフトビールの背景にある人や地域のイメージを喚起させてくれます。作り手の情熱やブリュワーが根付いた土地に思いを馳せ、ビールを酌み交わしながら様々な人が交流する風景を思い浮かべると、「クラフトビールが私たちの世界を変える」という少し大げさなタイトルも絵空事では無いように思えてきませんか。

今回、私自身の研究についてはあまり

深く触れることができませんでしたが、機会があれば改めてお話しさせていただくことにしまして、最後にあるブリュワリーについてご紹介し、本コラムの結びにしたいと思います。大阪・西成区にある、そのブリュワリーの名前は「Derailleur Brew Works」。店名の「Derailleur(ディレイラ)」とは「自転車の変速装置」を指すそうですが、「道を外す者」という意味もあるそうです。通称・釜ヶ崎と呼ばれるこの町では、日雇い労働者による暴動が過去に何度も起きており、歴史的な経緯などによる町のネガティブなイメージを少しでも変えられればという思いで造られたクラフトビールは「西成ライオットビール」と名付けられました。特筆すべきは、ライオット=Riot(暴動)と名付けられたこのビール造りを障害者が担っている

ということです。同ブリュワリーは障害者就労支援事業も兼ねており、このビール造りが日本の経済成長を縁の下で支えてきた釜ヶ崎の労働者だけでなく、ビール造りに携わる障害者たちの誇りも今後培っていくことになるのではないのでしょうか。そして、この取り組みは近い将来、与謝野町産のホップを使った与謝野町のクラフトビール造りを与謝野町の障害者たちが担う、そんな日が現実になることを予感させてくれます。

暑い日が続きますが、冷たいビールで喉を潤しつつブリュワリーの情熱に思いを馳せる、そんなお気に入りの個性派ビールを是非探してみてください。そして、与謝野町という京都府北部の風光明媚な町にも、今後注目していただければと思います。



<エッセイ>

沖縄のサンゴについての「どうーちゅいむにー」

三笥 利幸

最近すっかりペースが落ちたものの、1000本ほど沖縄の海で潜ってきた。20代でダイビングを始めた頃は、沖縄の海のことを聞く側だった。四半世紀が過ぎ、いつのまにか沖縄の海を語る側になっている。そして、20代で「昔はもっときれいだった」と聞いたその言葉を、まったく同じように繰り返している自分がいるのに気づく。なんとも言えない気分になるとは、まさにこのことだろう。

私の知る限りでの沖縄の海の大きな変化は、1998年だった。この年は世界的に海水温が高く、さらに沖縄には台風がほとんど来ず、高水温が解消されない年だった。

造礁サンゴは、褐虫藻という植物プランクトンと共生して、色とりどりの美しい姿を見せている。しかし、30℃を超える高水温が続くと、褐虫藻がサンゴから抜け出し、サンゴはやがて真っ白になって——白化現象——最終的には死んでしまう。

1998年はほんとうに暑かった。当時私が潜る拠点にしていた慶良間の海は、浅

い水深では30℃を超えていた。すると、あたりは見たこともないカラフルな世界になっていった。サンゴの他、イソギンチャクも白化するのだが、イソギンチャクの白化は、えも言われぬきれいな色になる。サンゴも完全に白化する前は、色が抜けはじめ、これまたいつもと違う色合いを見せる。

そもそも私が潜るのは写真を撮るため、毎月沖縄に行っては狂ったようにシャッターを切った。すばらしい色になったイソギンチャクとそこを住処にしているクマノミだけでも、この夏3000カットほど撮った。36枚撮りのリバーサル・フィルムを使っていた時代だから、われながらフラ——うちなーぐちで「バカ」——だと思う。

このとんでもない色彩をみせた海は、次の年、墓場となった。イソギンチャクはそれでも強く、死なずにまた元に戻ることがかなりあるのだが、サンゴは決定的なダメージを受けた。世界的にも白化が起きていて、たとえばモルディブのサンゴはほぼ全滅が伝えられた。それに

比べれば、沖縄はまだぎりぎりのところに踏みとどまっていたのだろう。というのも、このあと、沖縄ではサンゴ礁保全の動きもあり、だんだんとサンゴが再生・復活していったからである。

しかし、あと5年、いやあと3年すればまたサンゴの広がる海に戻りそうだと思っている矢先、今度はオニヒトデが繰り返し大発生した。オニヒトデはサンゴを捕食する。繁殖力も半端なく強く、また、半分に切られてもそのまま2匹になって生きていくほどの生命力を持つ。さらに、サンゴが死んでいく病気——ホワイト・シンドローム——も追い打ちをかける。2000年代はじめの慶良間の海は、再生することが困難と思われるほどのダメージを受けた。

この頃は、海に行くのが楽しみでありながら「昔はもっときれいだった」がどうちゅいむに一（ひとりごと）になっていたように思う。ダイビングを始めた頃数回行った八重山にもう一度潜ってみようと思い始めた。2000年代真ん中くらいだ。

八重山の海に広がるサンゴは、かつて見たあの沖縄のサンゴだった。いや、それ以上と言ってもいいほどのサンゴたち。石垣島のサンゴの素晴らしさは、また私を狂わせるに十分だった。さらにサンゴを求め、西表島へ。そこには石垣島を凌駕するほどの力強いサンゴたちがいた。私が20代の頃聞いた「昔はもっと

きれいだった」海は、たぶんこの西表島の海だろう。時代はデジタルに変わり、もう何カット撮ったなど数えられない。水中で映像確認もでき、撮り直しもできる。「36枚勝負！」と思って潜っていた時代と隔世の感がある。一眼レフの重い画像でも数百枚撮れるようになったカメラをもって、飽きもせず潜り続けた。

それでも、昔の沖縄の姿に酔うことができたのは、数年だった。2010年から11年頃、今度は石垣島をオニヒトデの大発生が襲った。私は日頃からオニヒトデを見つければ駆除しているし、駆除活動にも参加した¹⁾。目の前には無数のオニヒトデの群れ。火挟みでオニヒトデをサンゴから引き剥がし、ハンマーで細かく潰していく。半分にしたのでは2匹になるし、徹底して潰さざるを得ず、駆除作業といっても1回潜って100匹ほど駆除するのが限界だ（現在では、酢酸を注射するなど、もっと簡単な方法もある）。1時間ほど駆除作業を行い、ふと頭を上げると、目の前には見渡す限り一面埋め尽くすオニヒトデ。うなだれたのを覚えている。石垣島周りのサンゴはこれで壊滅的打撃を受けた。頼む、西表だけはやめてくれ……。

私は沖縄のいわゆる離島を中心に潜ってきているのだが、それは沖縄本島周りのサンゴが「復帰」以降の「開発」による埋め立てやオニヒトデ大発生などによって、ごく一部を除きほぼ壊滅状態だか

らでもある。そんななか、沖縄本島で昔の沖縄の姿をとどめているのが、大浦湾である。大浦湾と聞いてもなじみがない人が多いだろう。ただ、それを辺野古と言い換えれば驚きと戸惑いを覚えるはずだ。辺野古の海には、アオサンゴというサンゴの大群落がある。いや、それだけでなくここはサンゴ被度²⁾がかなり高い。生物種もきわめて豊富である。実際潜って、力強く生きるサンゴを見たとき、衝撃的でした。沖縄本島周りでこれだけのサンゴが活着しているのは奇跡に近いと言っていいと思います。

いまこの海が埋め立てられそうになっている。米軍普天間飛行場の返還と沖縄の基地負担軽減というゆくしむに一（ウソ）によって、辺野古に新基地が建設されている。辺野古新基地建設反対を掲げた翁長雄志沖縄県知事が8月8日に急逝し、9月末に知事選が行われることとなった。予断を許さない状況である。もちろん、そんなことをサンゴたちは知らない。しかし、海のなかのサンゴは、陸域で人間が何をしているのかを冷厳に映し出す。

この原稿は京都で書き上げようと思っていたが、そんな計画など守れるはずもなく、締切間近になって西表島で書いている。ここ西表島のサンゴにはまだ力強さが感じられる。西表では、一帯のサンゴがなくなってもそれがまた再生していくというサイクルが保たれている。〇〇

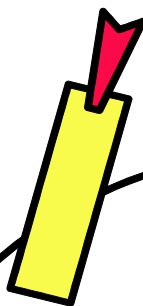
〇〇という場所は白化した、台風で飛ばされた、と聞いても、数年後には再生していることを期待できるのである。しかし、沖縄全体としては、「昔はもっときれいだっただ」という言葉を私はこれからも言い続けることになるだろう。もちろん、崩れていく自然を前にシニカルに立ち尽くすのではなく、ヴェーバー流に言えば、「日々の要求」に従っていかねればなるまい。もの言わぬサンゴの「声」をどこまで聞きとどけることができるのか、これが問われている。

さて、どう一ちゆいむに一はこのへんにして、また海へ。今回は、サンゴ礁の海にとどまらず、初めてマングローブの広がる汽水域にも潜ってくる。さらに別の「声」にも耳を傾けよう。

1) オニヒトデの大発生を、駆除作業で根本的に解決することはできない。駆除作業はかえって逆効果であると、駆除を疑問視する専門家もいる。なお、オニヒトデを見つけても、決して触らないように。オニヒトデのトゲに刺されると激痛とともに腫れ上がる。数年前、アナフィラキシー・ショックによる死亡事故も起こった。

2) サンゴが海底のどれだけの割合を覆っているかを示すものであり、サンゴ礁評価において基本的な指標として使われるもの。

Zapping 原稿募集



研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字~2,000字程度でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付してください。